

仏典翻訳の歴史とその変遷 ②

書写仏典の誕生と大乘仏教

現存最古の仏典写本はガンダーラで発見されており、その時期は紀元前後と推定されている。カローシュティ文字で書写されたそれらの写本の研究から、仏典書写の開始時期もその頃であったと推定されている。

マウリヤ朝アショーカ王の保護政策によって、仏教は教勢を拡大し、紀元前1世紀ごろになると、出家教団は次第に組織化され、その経済基盤も強固になりつつあった。在家信徒からの布施の一部は預金され、その利子が教団の定期的な収入となり、また、教団が所有する農地も安定した収入源となっていた。その結果、僧院は規模を拡大させ、その数も増え、布教の旅を続けていた出家者は次第に僧院に定住するようになっていった。このような出家者の生活様式の変化は、教えの伝承方法にも影響を及ぼしたと考えられる。出家者が遊行していた時は、書写されたものを持ち運び、教えを伝達するという方法は非現実的であった。やはり教えを記憶し口伝によって布教するという方法が一番効率的であったに違いない。しかし遊行生活を捨て、定住生活を送る段階においては、書写された典籍を維持管理することが容易となり、書写による仏典製作が始まったのではないかと考えられる。ナーランダールやヴィクラマシーラといった規模の大きな僧院が教理の研究機関として機能しはじめると、千人を超える学徒が教えの学問的な研究に没頭した。そのような状況においては、書写された典籍を自由に閲覧し研究することが求められた。口頭伝承から書写への流れは仏教史においては必然であったのかもしれない。

当然ながら口伝の場合、伝承の内容は伝達者という「人」に完全に依拠することになる。伝承内容の媒体はあくまで「人」であるので、伝達者に対する信頼が伝承内容の信憑性に直結する。しかし、書写された場合は、書写されたものそのものが伝承内容の媒体となる。その經典をだれが製作しようが、だれが朗誦しようが、あくまでも「テキスト」が伝承の媒体となる。この「人」から「テキスト」への媒体変化は、仏教史において新たな問題を提起することになった。それは、經典の内容が真に釈迦の教えなのかどうかという、それまで想起されていなかった新たな問いである。このような正統性への問いは口伝の場合成立しえない。なぜなら、口伝では、師の言葉を疑う行為そのものが伝承という伝統を破壊するからである。書写テキストの誕生、つまり、經の伝承内容が「人」から遊離した時点から、それ自身の正統性をどのように確保するのかという問題が生まれた。そのような正統性の確保には、既存の經典の次に新たに經典を製作するという方法が採られた。ある經典の正統性を証明するためには、それを担保するための新たな經典が必要となり、結果的に經典が經典を生み出すという連続的な運動が始まることになったのである。そのような連続した運動にこそ、經典の正統性が持続的に刷新されたので、一連の經典製作運動は匿名の經典製作者らによる連続的な営みとなっていった。

部派仏教の時代において、教団内で教えの正統性を議論する場合、その構図は「人」対「人」であった。しかし書写經典が出現してからは、その正統性の議論は「人」対「テキスト」の構図において展開されるようになっていった。

この「人」対「テキスト」という構図を考えると、やはり伝

達者である「人」は「テキスト」と比較するとはるかに有限である。当然ながら後世にまで残るのは「人」ではなく書写された「テキスト」ということになる。そして、その「テキスト」は伝承者を必要としない自立したものとして存在し続けることになり、經典製作という不断の営みによって更にその正統性を獲得していくことになった。

このような經典製作運動と大乘仏典の誕生は密接に関係している。

伝統仏教の經藏の編纂活動が閉じ、その内容が固定すると同時に、仏説をめぐる思想的いとなみは經藏の分析的思考力と体系的構成力を有する論藏の担い手たちのもとに集約され、仏説の術語の詳細な分析、相互関係の整理、その体系化へと関心が移行していった。そうしたなかであって、ほとんど形成活動が閉じた經藏を担うものたちの一部に、ブツダのことが書写經典のうちに存在することの重大な意義を洞見し、真の仏説への問いと經典の存在意義をとともに担うものが出現した。すなわち大乘經典出現の起源は伝統經典の担い手たち、つまり経師たちのもとにある。(下田, 2011: 58)

インドにおける口頭伝承では、その伝承内容がほとんど変容することなく受け継がれていた。これは、バラモンによるヴェーダの伝承からも明らかである。口伝の過程で若干の変化はあるものの、大幅な変容や新たな思想が入り込む余地はインドにおける口頭伝承において一般的には認められない。しかし、大乘仏教の思想においては、以前には全く説かれていなかった「六波羅蜜」などの新たな思想や、「空」や「縁起」、「菩薩」などの伝統教理の敷衍的解釈が展開されている。大乘の教理のようなかなり異なった要素が取り込まれていく過程には、やはり、個々人の閃きや新たな発想が反映される必要があり、おそらく教団などの組織的な口伝の伝統ではない、書写という伝承方法が前提となったのではないかと下田は指摘している。さらにその經典製作運動が始まると、それらの經典では、次第に經典書写の功德も積極的に説かれるようになっていった。大乘仏典の誕生には、伝統教団内における上述の伝承方法の変化と、「テキスト」の背後に隠れた匿名の経師たちの存在が関係していたと考えられる。

このように、經典が經典を生み、その結果、大乘においては多種多様で膨大な量の經典が生みだされることとなった。その内容が教理的変容を醸成し、書写經典は拡散していった。

伝統教団内において、経師たちは經のことに没入し、その中に自身の宗教的閃きや信仰的発露としての新たな解釈を残しつつ、現実世界に舞い戻り、文字化の過程で自己の痕跡を消し、さる営為を繰り返した。そして彼らは大乘仏典という新たな「テキスト」を生み出し続けた。その結果、「テキスト」の外で展開されていた仏教の諸々の活動の一部が「テキスト」に倣^{なま}って是正され、集約されていった。それらを包摂しながらまったく異質で新しい複合的概念として展開、組織化していったものが、後に大乘仏教と呼ばれるに至ったと考えられる。

[引用文献]

下田正弘「經典を創出する—大乘世界の出現」高崎直道監修『シリーズ大乘仏教2 大乘仏教の誕生』春秋社、2011年。